

論文の概要および審査結果の要旨

氏名（本籍）	プレモセリ・ジョルジョ（イタリア）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	甲第102号
学位授与の日付	平成31年3月18日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第5条第1項
学位論文題目	泰山府君の研究―変貌する「陰陽道神」
論文審査委員	A research on Taizan Fukun: metamorphosis of an “Onmyōdō deity” 主査 斎藤 英喜（佛教大学教授） 副査 八木 透（佛教大学教授） 副査 赤澤 春彦（摂南大学准教授）

〔1〕論文の概要

プレモセリ・ジョルジョ氏の博士請求論文『泰山府君の研究―変貌する陰陽道神』（以下、本論文）は、平安時代中期の安倍晴明に始発する「泰山府君祭」の祭神たる泰山府君が「陰陽道神」として成立する過程から、その神格が平安時代末期～鎌倉時代にわたってどのように変貌したかを、貴族の日記や陰陽師が読む「都状」の解説とともに、平安末期、鎌倉期の説話文学の分析を通して明かにしたものである。

近年、陰陽道・陰陽師の研究は、古代をはじめとして、中世、近世の各時代にわたって、飛躍的に進展したことは周知のところである。しかし、その研究はおもに歴史学研究が中心となったために、陰陽寮組織や「陰陽師」の実態、あるいは朝廷、幕府の宗教システムとの関わりなどの分析がメインとなっている。そうした研究状況の中で、プレモセリ氏の研究は、陰陽師が執行する陰陽道祭祀の中でも、もっとも重視されてきた泰山府君祭に注目し、その祭祀や神格がもつ「宗教性」の内実に踏み込むことをめざしたものである。その研究視点は、第一章の研究史と方法論の課題に述べられているように、「儀礼」研究の進展が新しい宗教研究を切り開いた研究動向を踏まえるものとなっている。

そこで第二章では、奈良時代までの卜占を主体とした陰陽師のあり方が、平安初期に「大難」儀礼に関わることで、陰陽師が呪術や祭祀の執行者となることを明らかにし、とりわけ国家祭祀としての大難儀礼から個人祭祀としての「追難」への変容する過程に着目することで、陰陽師が平安貴族社会の個人救済を担う存在になっていくことを明らかにした。

この考察を踏まえ、第三章では、古記録と都状を対象に、平安中期に七献上章祭と焰羅王信仰を基盤に形成された泰山府君が、焰羅王の眷属から脱却して道教神・仏教神を超越する「陰陽道神」として生成されることを分析し、つづく第四章では平安末期においては泰山府君の神格が、冥界だけでなく世俗の権力とともに、天文・暦の世界観を取り込む過

程を論じ、第五章では、鎌倉時代において「尊神」「十二冥道之尊長」「霊神」と呼称される神へと変貌していくことを明らかにした。

第六章では、説話文学の世界に視点を移し、『今昔物語集』の中で泰山府君が中国の道教的な神格から、安倍晴明説話と結びつくことで、陰陽師による個人救済の神へと変容することを明らかにし、第七章では『今鏡』、『古事談』、『十訓抄』の有国説話を取り上げ、安倍家陰陽師に独占された泰山府君の神格が、貴族社会に広がることで「冥界」信仰と結びつくことを明らかにしていった。

以上から、本論文は、貴族の古記録、陰陽師の都状、さらに説話文学を解読することで、泰山府君の神格が、時代の中で、また信仰の担い手によって変貌する、多元的な姿を持つことを結論とした。

以下、本論文の目次を掲げる。

序論 本論の目的と立場

第一章 先行研究の整理と本論の課題

はじめに

第一節 陰陽道の研究史

1. 戦前における陰陽道の研究史
2. 戦後における陰陽道の研究史
3. 一九九〇年代における陰陽道の研究史
4. 二〇〇〇年代における陰陽道の研究史
5. 最新の陰陽道研究史

第二節 泰山府君信仰の研究

第三節 神仏信仰の研究

第一部 古記録・都状にみられる泰山府君

第二章 陰陽寮の成立と変容—国家祭祀「大饗」から個人祭祀へ

第一節 陰陽道の基盤—陰陽寮

第二節 「大饗」から「追饗」への変貌

1. 中国における「饗」
2. 日本における「大饗」

第三節 平安中期の宗教文化と歴史背景

おわりに

第三章 平安中期における「陰陽道神」泰山府君の生成

第一節 中国における泰山府君—概説

1. 泰山信仰
2. 泰山信仰と道教・仏教

第二節 古記録から浮かび上がる「泰山府君」

1. 「泰山府君祭」の原型―「七献上章祭」
2. 「泰山府君祭」の初見と「焰魔天供」
3. 摂関期における泰山府君祭
4. 泰山府君祭―祭祀の目的と時刻

第三節 十一世紀の都状からみられる泰山

1. 『朝野群載』永承五年（一〇五〇）後冷泉天皇都状
2. 『三十五文集』承保四年（一〇七七）藤原伊房の息女都状
おわりに

第四章 平安末期における泰山府君の変貌

第一節 十二世紀の古記録における泰山府

第二節 十二世紀の「都状」における泰山府君

1. 『朝野群載』永久二年（一一一四）の藤原為隆都状
2. 『本朝続文粹』保延四年（一一三八）の藤原実行都状
3. 『台記』康治二年（一一四三）の藤原頼長都状

『台記』康治二年十二月七日条の記録

『台記』康治二年十二月七日条の泰山府君祭都状

第三節 安倍泰親と泰山府君祭

1. 「さすの神子」安倍泰親
2. 晴明邸宅と「公家の御祭」泰山府君祭

おわりに

第五章 鎌倉時代における泰山府君

はじめに

第一節 歴史的に変遷する泰山府君祭

1. 『猪隈関白記』における泰山府君祭の事例
2. 『玉葉』における泰山府君祭の事例
3. 『吾妻鏡』における泰山府君祭の事例

第二節 都状からみられる泰山府君祭の変貌

1. 『三十五文集』永万元年（一一六五）の藤原兼実都状
2. 『陰陽道旧記抄』承元三年（一二〇九）の藤原道誉都状

おわりに

第二部 説話にみられる泰山府君

第六章 『今昔物語集』の説話が語る「陰陽道神」泰山府君の生成

第一節 『今昔物語集』一震旦部の中の「泰山府君」

1. 震旦部一卷第七・第十二話の「泰山府君」
2. 震旦部一卷第七・第十九話の「泰山府君」

- 3. 震旦部一卷第九・第三十六話の「泰山府君」
- 第二節 『今昔物語集』一本朝部の中の「泰山府君」
- 1. 本朝部一卷第十九・第二十四話の「泰山府君」
おわりに

- 第七章 有国説話が語る泰山府君の広がり
- 第一節 晴明説話における泰山府君祭
- 1. 『今昔物語集』一本朝部の中の「泰山府君」
- 第二節 有国説話における泰山府君祭
- 1. 『今鏡』の有国説話を読む
- 第三節 拡大していく有国説話
- 1. 『古事談』の有国説話
- 2. 『十訓抄』の有国説話
- おわりに

結論

附録 泰山府君祭関連資料（平安期～鎌倉期編）

〔2〕審査結果の要旨

次に審査において示された、本論文の評価と問題点について述べる。

本論文の意義は大きく二つ挙げられる。まず、泰山府君および泰山府君祭について正面から取り組み、その解明を試みた点である。これまでの研究史においても泰山府君は注目されてきたが、主に安倍晴明との関わりについて議論が集中し、その執行者、神格、あるいは歴史的な変容については漠然としたままであった。とりわけ本論文が、神格に踏み込んで論じた点は今後の陰陽道研究において示唆に富む大きな成果である。それを可能としたのは、日記(古記録)に記された祭祀の記録だけではなく、泰山府君祭の儀礼の場で読まれた都状に焦点をあてて、その内容の解説に踏み込んだ方法的な視点である。それは近年の宗教史研究が「儀礼」に注目した動向を踏まえたものとして評価できる。

また、一時点でなく平安中期から鎌倉期までといった長い時代を通して歴史的な変容の過程を論じた点にも十分な評価を与えるべきであろう。

二つ目は院政期に大きな変貌を遂げたことを都状や公家の日記から明らかにした点である。近年の研究成果により院政期は政治体制の変容（院政と武士の政治参画）、社会基盤の変容（荘園制の展開）、宗教界の変動（顕密仏教の拡大、北斗信仰の隆盛、数量的功德主義の展開）といった国家や社会が大きく変容する重要な画期として注目される。こうした当該期の社会動向の中で泰山府君にまつわる神格や祭祀を位置づけた意義は大きい。本論文で明らかにしたことは陰陽道研究といった狭い枠組みのみならず、国家制度史や社会史、宗教史といったより広い議論に接続できる可能性を持っている。

ただし、課題も少なからず存在する。最も大きな問題は「神格」をどう捉えるかである。本論文における「神格の変容・変貌」は生成期を除き、泰山府君神の「性格」を明らかにしたものである。しかし、「神格」を「神の格式」と捉えた場合、他の道教神や仏教神と

の関係の中で泰山府君がどのように位置づけられるのか、またどのように変容するのかを論じる必要があるだろう。焰羅王の眷属から脱却した泰山府君はその後、道教や仏教、あるいは神祇の神々とどのような関係を結びながら（あるいは桎梏を経ながら）その「神格」が規定されてゆくのだろうか。これら神々との諸関係について更なる検討がほしいところである。

また、こうした神格の変容・変貌を担ったのはいかなる存在だったのであろうか。本論では社会的要求・欲求に応える形で変容したことを述べるが、これはある種当然といえは当然であり、こうした社会的な要求に対して陰陽師や密教僧がどのような形で関与し、手を加えたのか、この点は安倍晴明（およびその子孫たち）だけに限定させてよい問題とは思えない。第七章で有国説話を事例に異なる泰山府君の展開を論じているが、全体的に「泰山府君祭＝安倍晴明」と理解する研究史にやや引きずられている感がある。むしろこうした所与の前提を取り払い、改めて史料に即して丁寧に検討すべきであろう。（たとえば 11 世紀前半には賀茂氏も泰山府君祭を行っている）。

また、本論文において、重要な視角として密教との関係および黒田俊雄の顕密体制論への位置づけを提起するが、この点は非常に重要な論点であり、泰山府君の検討はその課題に応えることのできる素材と思われる。この点、今少し踏み込んだ検討があればさらに意義のある論文となったであろう。とりわけ当該期の密教修法祭文との比較検討などは必要となるだろう。

以上のような問題点や要望なども少なくないが、しかし、それにもかかわらず、泰山府君祭の都状の解読を正面きって行い、陰陽道組織や幕府、朝廷との制度的な関係に関する議論に集約されがちな陰陽道史研究の現状に対して、その「宗教性」を取り上げた本論文の意義は大きいものといわねばならない。なお、近年の欧米における日本宗教史研究、とくに密教、修験道、中世神道の研究の進展は、目を見張るものがあるが、そうした中で、欧米の若手研究者の中で、次の課題として注目されたのが「陰陽道」である。（ちなみに、2009 年にはコロンビア大学で「陰陽道」をめぐる国際研究集会も開催されている）。その意味で、イタリア出身のプレモセリ氏の研究は、欧米の研究者にとつても、先鋭的な研究成果となることは間違いないだろう。

よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに相応しいと判断する。